

 書評

 鹿島晴雄，古城慶子，古茶大樹，針間博彦，前田貴記 編
妄想の臨床

大宮司信

よく言われるように幻覚と並んで妄想は精神医学の2大問題の1つであり，精神科医にとってきわめて近いが，解決が常に先に延ばされる課題である。本書は，コンパクトな形で現代の妄想研究の到達点を示す成書である。現在活躍中の方々，またこれから活躍が期待される方々など，現在最も旬な人たちが執筆されており，これ1冊で現在の妄想論，特に妄想の精神病理について十二分に知ることができる。文化的拮抗および治療論についても端的で納得のいく説明が加えられている。

妙な書き方になるのだが，焦点がはっきりして腑に落ちる項目だけでなく，ぼんやりして再度読み直す項目があることが評者には好ましい。そうした項目の筆者の責任や筆力不足ではない。もともとその項目を主張し出した者の記載自体があいまいであったり，ぼんやりしているのだ。そうした事情が分かることから項目著者の力量がよく分かる。

ひとつひとつが独立した記述になっているので，まず各論的な第2部から開かれるのがよいかもしれない。各種の妄想が幅広く網羅され記述されている。その前の部分に置かれている総論では，凝縮された中身の濃い説明がなされている。これだけまとめて1冊の中に妄想の総論が語られている成書はなかなか見出せない。そんな意味でも「お得な」1冊である。

私的なことになるが，本書の中安信夫氏の記載(235頁)にある諏訪望先生は評者の恩師であるが，この諏訪による妄想に関する「訂正不能な判断の誤り」という箇にして要を得た定義は，妄想の定義的内容を提示するだけでなく，判断への過度の確信と齟齬という側面をクローズアップする。そんなことを考えると，挫折への過敏・持続的な恨み・猜疑心・自己の権利への固執などを特徴とする用語である

paranoid という語を含む paranoid personality disorder を「妄想」性パーソナリティ障害と翻訳するのには疑義があるとする針間博彦氏の趣旨(54頁)は説得性を持つ。

冒頭にも書いたが，錚々たる「旬の人」，「これから旬の時節を迎える人」を選ばれ迎えられた編集代表の鹿島晴雄氏，そして同氏を支えた編集者の方々の慧眼に恐れ入る。また一方，梓にとらわれず，自由に妄想論，あるいは妄想に関する日頃の見解を披瀝されている著者が多数見られるのもさすがしい。ルサンチマンといえどニーチェの看板だが，シェラーの哲学をふまえ，新たな角度からルサンチマンと妄想形成を論じた濱田秀伯氏の論考は読み応えのあるその1例である。

妄想着想に関するシュナイダーの論文を研修医の方々と読まれた成果が本書に登載されていると前書きに触れられている。精神病理の仕事は，臨床現場に根ざすことは言うまでもないが，読み・考え・書くことに主眼があると評者は考えている。それも単独ではだめで，志を同じくし，互いに言いたいことを言い合える仲間との共同の修練・作業が必要と思っている。本書はそうした読書会あるいは研究会を背景にして編み上がったタペストリーであろう。

精神医学の初歩の方でももちろん読んでいただければ，少し臨床経験をお持ちになり，これから専門医を目指そうとする方，あるいはすでに専門医となられてさらに知見を深めようとする方に格好の書物である。

(北翔大学人間福祉学部)

●A5 500頁 2013 定価：本体7,000円＋税
 新興医学出版社刊